

藤原公任と白居易

—『和漢朗詠集』における白居易の詩をめぐって—

黄 金 堂

(2003年9月30日受理)

A Comparative Study on Fujiwaranokintou and Bai Ju-Yi
— With a Special Focus on Bai Ju-Yi's Poetry in Wakan-rouei-syu —

Huang Chin-Tang

The aim of this paper is to ascertain the likeness between Fujiwaranokintou and Bai Ju-Yi. *Wakan-rouei-syu*, an anthology of Japanese and Chinese poetry, is edited by Fujiwaranokintou in the middle periods of the Heian era. His anthology in the Heian era conveys a great influence not only upon the esthetics at that time but also upon the future generations of Japan's literature. Fujiwaranokintou selected most of all the poems of Bai Ju-Yi in his *Waka-rousei-syu*, because he had sympathy for the sense of uncertainty of life in the poems of Bai Ju-Yi.

Key words: Fujiwaranokintou, Bai Ju-Yi, *Wakan-rouei-syu*, sense of uncertainty of life

キーワード：藤原公任，白居易，和漢朗詠集，無常観

1. はじめに

『和漢朗詠集』(1012)は平安中期の藤原公任(966～1041)による詩歌選集である。『和漢朗詠集』の書名から分析すれば、「和漢」とは、〈和歌〉と〈漢詩文〉の意を示している。そして、〈朗詠集〉とは、朗詠の形式に相応しいものを精選した詞華集のことを意味している。藤原公任は平安時代の「三船の才」を持つ人物という呼称が示しているように、漢詩・和歌・管弦の才に秀で、『和漢朗詠集』により、平安時代の美意識の根底を定め、次の時代に大きな影響を与えた。

『和漢朗詠集』に収録されている和漢の名詩歌が洗練された平安王朝サロンの雰囲気を反映し、また平安文学の中で、『和漢朗詠集』は特に中国文学と深く関わっていると考えられる。とりわけ、『和漢朗詠集』803首の中に、白居易の詩句は136首も選ばれ、首席の栄冠に輝いている。先行研究では、『和漢朗詠集』と白居易との関わりが深いことが指摘されているが、具体的な研究は少ない。本稿では主に白居易の漢詩を選出した藤原公任の人生観と美意識がどのように白居易

と共鳴しているかを考察することを目的とする。

1.1. 先行研究

『和漢朗詠集』については多くの先行研究がなされているが福田俊昭の次のような論点が興味深い。

彼は「和漢朗詠集に見える公任の潜在意識と学識」において、藤原公任の思想を反映するものとして、『和漢朗詠集』を次のようにとらえている。

詩文の句を抽出するには、それなりの目的があつて抽出するのである。従つて、抽出された詩句や摘句には何らかの意義を含有しているはずである。それが、朗詠集に於いては、各門目の題目に適していることが肝心であるが、只それだけではない。数ある題目に適した詩文の句の中から抽出するのであるから、その取舍選択には、撰者の思考が大いに作用してくることは否めない。そしてその思索過程に於いて、当然撰者の思想なり、主張なり、嗜好等が加味されるであろうことは、容易に推知できるのである¹⁾。

(下線は引用者による。以下同じ。)

また、福田俊昭は「和漢朗詠集所引の白氏文集」において、『和漢朗詠集』と『白氏文集』との関わりを示し、『白氏文集』の伝本の系統について次のように論及した。

日本の中古文学の中で中国文学と深い係りをもつ作品の一つに『和漢朗詠集』がある。『和漢朗詠集』は中国の詩文と日本の詩歌から、分類された門目(四季・雑)に適合する詩句や和歌を摘出して編集したもので、そこには多数の作品が引用されている。その作品の中で最も多く引用されているのが、『白氏文集』である。これは『和漢朗詠集』の特色の一つでもある。(中略)底本に使用している『和漢朗詠集』が行成筆本であることを勘案すると、公任の『和漢朗詠集』を写す過程において、自筆の『白楽天詩巻』によって改訂したとも言える。少なくとも自筆の白楽天詩巻がある以上、これを利用したことは自明の理である。惜しむらくは伝行成筆本『白楽天詩巻』が残巻であることである²⁾。

このように、藤原公任が『和漢朗詠集』を編集する際、白居易の詩が一番多く引用されたことは事実であるが、その理由はどこにあるかという視点、また白居易の詩が『和漢朗詠集』にどのように分布されているかについて、もう少し論を進めて、そこから藤原公任と白居易の類似点を探ってみたい。

2. 藤原公任と白居易について

藤原公任は康保三年(966)年に誕生し、長久二年(1041)年1月1日に75歳をもって逝去した。

天元三年(980)2月25日、15歳の時、円融天皇の御前で加冠、正五位下に叙せられ、昇殿をゆるされた。父が関白太政大臣で姉の遵子が女御として入内しているという関係で、このような栄誉ある待遇を受けたのである。

同年7月1日侍従に就き、永観元年(983)左近衛権中將に任じられ、永延3年(989)2月には蔵人頭に補された。正暦3年(992)8月28日参議に任じられた。時に27歳であった。

長徳元年(995)8月には左兵衛督、同年9月には皇后宮大夫を兼ねた。翌年右衛門督、檢非違使別当となっている。長徳五年正月7日叙従三位、長保三年(1001)8月25日任中納言、この年左衛門督に転じ、

正三位とされた。同年(1001)6年7月臨時に従二位に叙された。前年11月から出仕せず、上表していたのを慰留するためであった。寛弘6年(1009)3月4日任権大納言、同9年(1012)には正二位に叙された。寛仁五年(1021)正月按察使を兼ねている。万寿元年(1024)12月10日官を辞した。時に59歳であった。同3年正月4日出家、長谷に籠居した。

その有様は『栄花物語』、巻第27「ころものたま」に詳述されている。尊卑文脈に「才人和漢博覧哥人和漢朗詠集撰者云々」と注するように、藤原齊信、源俊賢、藤原成行と共に四納言の一人として、一条朝時代の文化の主導者であった。

『如意宝集』、『拾遺抄』、『深窓秘抄』、『金玉集』、『前十五番歌合』、『三十六人撰』、『和漢朗詠集』などの秀歌選あるいは秀句選、『新撰髓脳』、『和歌九品』、『歌論義』(散逸)、『四条大納言歌枕』(散逸)などの歌学書、有職故実書である『北山抄』、仏典の注釈書である『大般若経字抄』など、多くの著述を残している。私家集としては『公任集』がある。中古三十六歌仙の一人である。

白居易(772~846)は中唐の代表的な詩人として知られているが、字(あざな)は楽天で、また香山居士、醉吟先生とも称した。彼は古くから日本人に最も親しまれた詩人であると言われている。菅原道真は彼の詩の〈忠実な祖述者〉であると評され、また藤原公任を始め、紫式部、清少納言たちも白居易の詩の愛好者であった。白居易の作品集『白氏文集』は日本文学に深く影響を与えたと言えよう。

白居易は772年に河南省(鄭州)新鄭県に生まれた。776年5歳の時から作詩を始めたと言われている。780年の9歳の時、詩の声律を暗記することができた。そして、787年の16歳の時に、初めて長安に出、顧況に詩才を認められる。800年29歳において、進士科に及第した。806年35歳の際、上級試験に合格し、県尉となった。807年時36歳で、翰林学士を経験し、翌年、左拾遺になった。

809年38歳から「新楽府五十首」を創り始めた。815年44歳の時、江州の司馬に左遷され、45歳に「琵琶行」という名作を残した。翌年、廬山の香炉峰下に草堂を築き、50歳から57歳までは、中書舍人、杭州刺史、刑部侍郎などの官職を経験した。829年58歳の時、仏教に惹かれ、洛陽に隠棲しはじめた。836年65歳になった時、太子少傅に勤め、842年71歳の刑部尚書を最後にして退官した。845年74歳に『白氏文集』七十五巻を完成させた。翌年の8月に、75歳で他界した。

白居易の主な著作としては『白氏長慶集』(50巻)、

劉白唱和集（5巻）、白氏文集（75巻）等が挙げられる。

3. 『和漢朗詠集』における白詩の分布

『和漢朗詠集』の上巻は「春・夏・秋・冬」という四季の類目とそれぞれの四季の項目から構成され、下巻は雑の四十六項目から成り立っている。

『和漢朗詠集』に収録された白居易の詩の分布を部立別に調査した結果は以下の通りである。

上巻

春：4, 5, 10, 18, 20, 27, 50, 51, 52, 66, 67, 75, 87, 102, 103, 104, 105, 114, 115, 126, 127, 133, 137

夏：445, 144, 147, 150, 151, 159, 160, 161, 168, 171, 175, 176, 192, 199

秋：204, 208, 209, 221, 222, 223, 230, 233, 234, 779, 780, 781, 235, 242, 243, 252, 254, 455, 482, 266, 286, 291, 301, 302, 308, 309, 327, 328, 338, 341, 345

冬：352, 356, 359, 362, 367, 375, 376, 387, 393

下巻

曉：419。松：421。竹：430。草：435。鶴：445, 446。猿：455, 456。管弦：463, 464。文詞：471。酒：480, 481, 482, 483, 484。山：492。山水：501。水：511, 512, 513。禁中：521, 522。故宮：531。仙家：541。山家：554, 555。田家：565。隣家：572, 573。山寺：579。仏事：588, 589。閑居：613, 616, 617, 618。眺望：624。餞別：631。帝王：655, 656。親王：666。丞相：676。王昭君：697。妓女：707。老人：722, 723, 724。交友：733, 734。懷旧：740, 741, 742, 743。述懷：753, 755。慶賀：765。恋：777。無常：791

上巻の「春」は23首を占め、「夏」14首、「秋」31首、「冬」9首という分布結果である。下巻の47項目の部立の中で白居易の詩が35項目に分布されている。その35部立の項目の中に、「酒」「水」「閑居」「老人」「懷旧」という部立は白居易の詩の割合が高いといえよう。

「酒」は479首目から490首目までの12首の中で、480首目から484首目までの5首の詩が白居易の詩作である。「水」の部立では11首中に、511首、512首、513

首の3首の白居易の詩が採録されている。「閑居」の部立においては、11首の中に613首、616首、617首、618首の4首が収載されている。そして、部立「老人」の中では11首中、722首、723首、724首の3首が挙げられる。「懷旧」の部立では10首中、最初の4首（740, 741, 742, 743）が白居易の作である。

3.1. 白居易の惜春詩

『和漢朗詠集』の部立から見れば、藤原公任は上巻の「春夏秋冬」という自然の循環を「反」（恒常）と見做していることに対して、下巻の「風・雲・水」のような「不反」（循環しないもの）の性質を持っているものを人生の〈無常〉と同視していると言えよう。『和漢朗詠集古注集成』「書陵本部 朗詠抄」によれば、「不反」について、次のように述べている。

上巻ノ景様ヲハ、反ト云。下巻ヲハ、不反ト云也。上巻ニハ、四季并ニ、景物ヲ連テリ。四季ト者、春ノ分ニハ、立春、早春、乃至、三月尽。夏、秋ノ分ニハ、如是。景物ト者、春ハ、霞、雨、梅、桜等也。夏、秋ノ景物ニハ、如是。此等ハ、春ハ夏ニ移リ、夏ハ秋ニ移行ヲ転反ノ形ナレハ、反ト云也。下巻ノ題ノ置キ様ハ、不反ノ兒夕新物ヲ旨トセリ。所謂ル風ヨリ水ニ至マテ、世界也。禁中ヨリ山寺ニ至マテ、世界ノ人ノ家也。自仏事ニ至マテハ、家ノ中ノ所行也。自帝王ニ交友ニ至マテハ、所行ノ人也。懷旧ヨリ以下ハ、皆所行ノ人ノ思ヲ述リ。

上巻の〈恒常〉と下巻の〈無常〉は、『和漢朗詠集』の解明に大きな鍵を握っていると思われる。『和漢朗詠集』の上巻は「春・夏・秋・冬」という四季の部立となっている。

『和漢朗詠集』上巻の部立は「春夏秋冬」という四季の性質に基づいて考えた構造である。〈恒常〉という概念は自然の不変性による循環である。「春夏秋冬」の〈恒常〉とは対蹠的に、『和漢朗詠集』下巻の部立は刻々に変化している風雲・流水のような自然の変わる性質や人事を歌う詩歌を選び、諸行〈無常〉の思想を披歴していた。藤原公任は自然の恒常不変性を自然の風流として見るのみならず、〈惜常〉の重要性も示唆している。

そして、『和漢朗詠集』における白詩の分布は「春・秋」の数は「夏・冬」に勝る理由は、白居易の「春」「秋」の部立に採録された詩から見よう。

燭を背けては共に憐れむ深夜の月、
花を踏んでは同じく惜しむ少年の春。

(背燭共憐深夜月，踏花同惜少年春。)

【上卷27 春 春夜 白居易】

春を留むるに春住まらず，春歸つて人寂漠たり。
風を厭ふに風定まらず，風起つて花蕭索たり。

(留春春不住，春歸人寂漠。厭風風不定，風起花蕭索。)

【上卷50 春 三月尽 白居易】

惆悵す春帰つて留むることを得ず，
紫藤の花の下に漸く黄昏。

(惆悵春帰留不得。紫藤花下漸黄昏。)

【上卷52 春 三月尽 白居易】

落花語はずして空しく樹を辞す，
流水心無うして自ら池に入る。

(落花不語空辞樹，流水無心自入池。)

【上卷126 春 落花 白居易】

朝には落花を踏んで相伴つて出づ，
暮には飛鳥に随つて一時に帰る。

(朝踏落花相伴出，暮随分飛鳥一時帰。)

【上卷127 春 落花 白居易】

「花を踏んで同じく惜しむ少年の春」「春を留むるに春住まらず」「惆悵す春帰つて留むることを得ず」この三句では「春」を惜しむというテーマが歌われている。人生の少年の時期は、四季の「春」のように、非常に貴重な時であることを強調している詩句であるが、その一方、どの花も「落花」になるという避けられない運命を通して、人生の「春」を惜しむべきだという主張は、藤原公任と白居易に共通する感覚と言える。

3.2. 「春秋」と「落花」のシンボル

そもそも「春秋」という用語は春と秋だけを意味しているとは限らず、「年月・歳月・年齢」の意味も含まれている。『和漢朗詠集』上巻における白居易の詩句は「春」と「秋」の部立に集中した理由としては、藤原公任が「春秋」を「年月」の意として選び出したことが考えられる。また、『春秋』とは「魯」を中心とする歴史書で、魯の国の年代記を表す。春秋冬夏が終わって、歳(一年)をなすのだが、「春秋」の二字を挙げれば、それで「冬夏」も分かるということである。

「春・秋」という言葉を「年月」の意味で使われているのは屈原『楚辞』の「離騷」の次のような用例が早いものと思われる。

日月忽其不淹兮，春與秋其代序。惟草木之零落兮，恐美人之遲暮。

(日月は忽として其れ淹まらず，春と秋其れに代序す。草木の零落を惟ひ，美人の遲暮を恐れる。)⁴⁾

【楚辞】「離騷 第一段」

屈原は月日の流転が留まらず，春と秋が速やかに交代することを悲しみ嘆いている。これを草木の枯れ落ちることと美貌が無くなったことに喩えている。またその美しさを表現する際には、「落花」というイメージがよく詩歌に用いられている。たとえば，白居易の「落花不語空辞樹」や「朝踏落花相伴出」のような表現は，自然の必然性を人生にたとえ，我が身も同じであることを至妙に物語っている。

次に、「春秋」という熟語がいつから「年月」を意味するのかという問題はやはり『楚辞』の「遠遊」から語るしかない。屈原「遠遊」を紐解けば，このように記述している。

重曰春秋忽其不淹兮，奚久留此故居。軒轅不可攀援兮，吾將從王喬而娛戲。

(重ねて曰く，春秋は忽として其れ淹まらず，奚久しく此の故居に留まらん。軒轅は攀援す可からず。吾將に王喬に従つて娛戲せんとす。)⁵⁾

【楚辞】「遠遊 第四段」

こうした「春秋」という用語は『和漢朗詠集』にも見られる。

長生殿の裏には春秋富めり，不老門の前には日月遅し。

(長生殿裏春秋富，不老門前日月遅。)

【下巻774 祝 慶滋保胤】

この詩句は「天子の治世が平和で万年も続くことを祝ったもの。時代や場所を，漢代の長安や洛陽の実在したものにことよせて，祝意を増幅させている。」⁶⁾とされる。ここの「春秋富」という文意は年齢が若く，将来に長い年月を持っているという意味である。人の年齢を「財産」に喩えるのである。

「春秋富」という表現は司馬遷の『史記』巻九，「呂太后本紀第九」に見られる。そこでは，「春秋」に関しては次のよう表現が見られる。

齊王迺遺諸侯王書曰：「高帝平定天下，王諸子弟，悼惠王王齊。悼惠王薨，孝惠帝使留侯良立臣為齊王。孝惠崩，高后用事，春秋高，聽諸呂，擅廢帝

更立、又比殺三趙王，滅梁，趙，燕以王諸呂，分齊為四。忠臣進諫，上惑亂弗聽。今高后崩，而帝春秋富，未能治天下，固恃大臣諸侯。而諸呂又擅自尊官，聚兵嚴威，劫列侯忠臣，矯制以令天下，宗廟所以危。寡人率兵入誅不當為王者⁷⁾。」

「高后用事，春秋高」と「帝春秋富」とは対蹠な意味として使われている。これは呂太后の高齡と皇帝の春秋に富むことを記述している一節である。

4. 白居易の詩と無常観

『和漢朗詠集』上巻に収載された白居易の詩には二つ傾向が見られる。一つはただ自然の風趣を歌うことであり、今一つは自分の心情を述懐する「惜春」の詩が多いことである。なぜ藤原公任が白居易の惜春詩のテーマを多く採用したかという疑問は彼の波瀾の人生を振り返れば、想像に難くない。

先に見たように、藤原公任の人生の前半は官職に恵まれているが、後年になって、昇進の遅滞に慨嘆し、大納言に及ばないまま官職を辞めた。その後は、隠遁の生活を暮らした。

藤原公任の官位は正二位権大納言まで昇進したが、長保二年（1000）より官位の昇進が遅滞していた。万寿元年（1024）に正二位権大納言の官職を辞めた。

『和漢朗詠集』というアンソロジーは1012年に完成したものであり、このような人生の不遇に逢着した藤原公任は『和漢朗詠集』の詩歌を取捨する際に、彼の心に響きあうものに限って採録したのではなかろうか。そして、藤原公任は白居易の政治・社会を風諭する詩を『和漢朗詠集』から排除し、自然の景色と人生の無常だけを採録した理由については、『和漢朗詠集』の下巻から検討したい。

4.1. 「琴・詩・酒」と「管弦・文詞・酒」

『和漢朗詠集』下巻の部立「交友」には、次のように歌っている。

琴詩酒の友は皆我を抛つ、雪月花の時是最も君を憶ふ。

（琴詩酒友皆抛我，雪月花時最憶君。）

【下巻733 交友 白居易】

この詩は琴・詩・酒という三友の主題を中心とする白居易の詩作である。人事の変遷は美しい景色の中で、鮮明かつインパクトのある印象を伝えている。往時、一堂に琴を弾じ、詩を作り、酒を飲んで楽しんだ旧友

たちは、白居易から去って、そのことを感慨深く歌った詩作である。

『和漢朗詠集』下巻の47項目の部立の中で、白居易の詩が35項目にまで及んでいる。その中に、「琴詩酒」と対応している部立は三連続の「管弦」（2首）、「文詞」（1首）、「酒」（5首）の部立である。これは藤原公任が意図的に白居易の「琴・詩・酒」を擬して作った部立と言えよう。

「管弦」という部立には、白居易の詩が2首引用されている。

第一第二の絃は索索たり、
秋の風松を払つて疎韻落つ。
第三第四の絃は冷冷たり、
夜の鶴子を憶つて籠中に鳴く。
第五の絃声は尤も掩抑せり、
隴水凍り咽んで流れ得ず。

（第一第二絃索々，秋風払松疎韻落。第三第四絃冷冷，夜鶴憶子籠中鳴。第五絃声尤掩抑，滝水凍咽流不得。）

【下巻463 管弦 白居易】

随分の管絃は還つて自ら足れり、
等閑の篇詠人に知られたり。

（随分管絃還自足，等閑篇詠被人知。）

【下巻464 管弦 白居易】

詩人は音楽や詩に託して、自分の思うことや感情を表出している。『和漢朗詠集』「管弦」の463首の詩は管弦の音を通して、夜の鶴がそれを聴いて籠の中に悲しく鳴いている様子を歌っている有名な詩である。詩文は人間の社会で創られた約束の言葉として魂の交流にふさわしいものである。管弦は詩文の性質と違って、動物でも管弦の音を聴くと、その音から伝わってきた音律によって悲しくなったり嬉しくなったりすることがある。

次に、詩文の性質について見よう。『和漢朗詠集』「文詞」の部立には、永久と須臾のものを以下のように表象している。

遺文三十軸，軸軸金玉の声。

龍門原上の土，骨を埋めて名を埋めず。

（遺文三十軸，軸軸金玉聲。龍門原上土，埋骨不埋名。）

【下巻471 文詞 白居易】

この詩句は人生のはかなさを歌っているにもかかわらず

らず、後世に残せるものは何だろうかと問うている。それは恐らく詩文・名誉であろう。『和漢朗詠集』は「朗詠」という方式で和歌や漢詩文を後世に残したい気持ちをこめたものであると言えよう。

「酒」は特に詩人たちに好まれている物として知られている。古の人は酒を借り、自分の気疲れや煩惱を取るものとしてよく利用していた。たとえば、次の詩文を見よう。

晋の建威將軍劉伯倫は酒を嗜んで、酒徳頌を作つて世に伝ふ。唐の太子の賓客白樂天もまた酒を嗜んで、酒功讃を作つて以て之に継ぐ。

(晋建威將軍劉伯倫嗜酒，作酒徳頌伝于世。唐太子賓客白樂天亦嗜酒，作酒功讃以繼之。)

【下巻480 酒 白居易】

これは白居易の「酒功賛 并序」の始めに書いた詩句である。その後、「離人遷客，転憂為楽」は酒の効き目を記している詞である。下巻の483首も酒の効き目について説いている。

茶は能く悶を散ずれども功を為すこと淺し，
萱は憂へを忘ると導へども力を得ること微なり。

(茶能散悶爲功淺，萱導忘憂得力微。)

【下巻483 酒 白居易】

それに継いで、酒の楽しみを歌う詩句も詠じている。

生計抛ち来つて詩これ業なり，
家園忘却して酒郷たり。

(生計抛来詩是業，家園忘却酒爲郷。)

【下巻482 酒 白居易】

もし栄期をして兼ねて酔ひを解らしむれば，
四楽言ふべく三と言はず。

(若使栄期兼解酔，応言四楽不言三。)

【下巻483 酒 白居易】

『和漢朗詠集』「酒」の部立には、もう一つ特徴的な詩句が挙げられる。次の詩句は、酒を飲んで顔色が紅葉のように赤くなった老人であるが、残念ながらその赤い顔色は、若い人の「青春」を有していない。

風に臨める杪秋の樹，酒に対へる長年の人。醉貌は霜葉のごとく，紅なりと雖も是春ならず。

(臨風杪秋樹，對酒長年人。醉貌如霜葉，雖紅不

是春。)

【下巻481 酒 白居易】

五行説によると、「春」は青に当てることで、「青春」は年の若いことを意味している。人生の秋になった長年の人にとって、「青春」は求めようとしても求められないものである。

白居易の「琴・詩・酒」の詩を読み、『和漢朗詠集』の部立を考察するならば、明らかに藤原公任が白居易の「琴詩酒友皆抛我，雪月花時最憶君。」(寄殷協律)を擬して作った部立であると言えよう。

4.2. 「老人・懐旧」と無常

『和漢朗詠集』の「閑居」618首には、「官途は此より心に長く別る，世事は今より口に言はず」とあるが、当時の白居易(817年)は廬山の香炉峰の草堂に隠遁していた。仕官の運が恵まれていなかった時期である。一方、藤原公任も四十代にして、官途の頓挫も経験した。

二人の同じ不遇との遭遇から見れば、白居易がその時期に創作した詩は藤原公任の心の琴線に触れたことが推定できよう。また二人は当時としては長生きであり、70歳まで生きたのであるが、それは友人や親しい人たちとの死別をも意味した。

昔は京洛声華なる客と為り，
今は江湖の潦倒たる翁となりたり。

(昔爲京洛声華客，今作江湖潦倒翁。)

【下巻722 老人 白居易】

老の眠りは早く覚めて常に夜を残す，
病の力は先づ衰へて年を待たず。

(老眠早覺常残夜，病力先衰不待年。)

【下巻723 老人 白居易】

再三汝を憐れむは他の事に非ず，
天寶の遺民は見るに漸く稀なり。

(再三憐汝非他事，天寶遺民見漸稀。)

【下巻724 老人 白居易】

白居易の旧友であった元稹は唐・大和5年(831)7月23日に、崔羣は同6年8月に、崔玄亮は同7年7月11日に、それぞれ相次いで長逝した。どんな時に、人間は無常を感じるのだろうか、恐らく親友や妻との死別より強く感じるものはないだろう。故人を懐かしむ思いは人間の心から自然に流れ出したのである。

『和漢朗詠集』「懐旧」の部立には第740、741、742首

と藤原公任は白居易の詩を並べている。

黄壤 誰か我を知らん、白頭 猶ほ君を憶ふ。
唯だ老年の涙を將って、一たび故人の文に灑く。
(黄壤誰知我、白頭猶憶君。唯將老年淚、一灑故
人文。)

【下巻740 懷旧 白居易】

長夜に君先づ去る、残年我幾何ぞ。秋風に衫に満
ちる涙、泉下に故人多し。

(長夜先君去、残年我幾何。秋風襟滿淚、泉下故
人多。)

【下巻741 懷旧 白居易】

往事渺茫として都て夢に似たり、旧遊零落して半
ば泉に帰す。

(往事渺茫都似夢、旧遊零落半泉。)

【下巻742 旧懷 白居易】

村上天皇が女御述子を亡くした時、女御の父である
藤原実頼に贈った歌を例にすれば、「昔をばかけじと
思へどかくばかりあやしくめにもみつ涙かな」(下巻
748 懷旧 村上天皇)とあるが、昔のことを思い
出さないようにしようと思う村上天皇は、やはり自分
の涙を禁じ得なかった歌である。また、懷旧的最後の
歌として載っているのは藤原為頼の「世の中にあらま
しかばとおもふ人なきは多くもなりにけるかな」(下
巻748 懷旧 村上天皇)という感慨深い歌である。
年ごとに、亡くなった友人がだんだん増えることを嘆
いた。

5. 『公任集』と無常の歌

『和漢朗詠集』の上巻の「春夏秋冬」という四季の
部立には自然の〈恒常〉を中心に編集した藤原公任の
思考が窺える一方、下巻には人事を自然に託した感慨
の深い〈無常〉の意図が察知できるようである。

白居易の「対酒五首 其二」の詩句を選んでい
ることからも推察されよう。

蝸牛の角の上に何事をか争ふ、石火の光の中に此
の身を寄す。

(蝸牛角上争何事、石火光中寄此身。)

【下巻791 無常 白居易】

『和漢朗詠集』における〈無常〉の部立の詩歌を藤
原公任の家集『公任集』⁸⁾と比較してみよう、公任は

人間の〈無常〉を次のように喩えている。

維摩經十のたとひ

此身泡のごとし

ここに消かしここに結ぶ水の泡の憂世にすめる身に
こそ有けれ 291

此身水の月のごとし

水の上に宿れるよはの月影のかすとぐべくもあら
ぬ我身を 292

此身かげろふのごとし

夏の日の照しも果ぬかげろふの有かなきかの身と
はしらずや 293

此身芭蕉葉のごとし

風ふけば先やぶれぬる草の葉によそふるからに袖
ぞ露けき 294

此身幻のごとし

此身をば跡も定めぬ幻のよにあるものとおもふべ
しやは 295

此身夢のごとし

常ならぬ此身は夢のおなじくはうからぬことを見
るよしも哉 296

此身影のごとし

世の中に我有ものと想ひしは鏡の内の影にぞ有け
る 297

此身響のごとし

ありときく程に聞えず成ぬれば身はひびきにもま
さらざりけり 298

此身行雲のごとし

定なき身をうき雲にたとへつつ果はそれにぞ成は
てぬべき 299

此身雷のごとし

稲妻の照す程には入る息の出るまつ間にかはらざ
りけり 300

「維摩經十喩」とは現世の無常を、聚沫・泡・焰・
芭蕉・幻・夢・影・響・浮雲・雷光などに喩えて説い
ていることを指す。藤原公任の『公任集』では我が身
を「維摩經十喩」に擬して、十種類に喩えている。つ

まり、「泡・水の月・かげろふ・芭蕉葉・幻・夢・影・響・行雲・雷」などの言葉を以て、「無常」を具現しようとしていると考えられる。このように「無常」について考察してみれば、藤原公任は白居易の作った〈無常〉の詩について、深い関心を持っていることが明らかになるであろう。

6. おわりに

藤原公任の思想を捉えるために、『和漢朗詠集』の部立と白居易の詩の分布ならびにその内容を考察してきた。

『和漢朗詠集』上巻の部立は「春夏秋冬」という四季の性質に基づいて考えた構造である。〈恒常〉という概念は自然の循環による不変性である。「春夏秋冬」の〈恒常〉とは対蹠的に、『和漢朗詠集』下巻の部立は刻々に変化している風雲・流水のような自然の循環せずに変わる性質や人事を歌う詩歌を選び、諸行〈無常〉の思想を披歴していた。

おわりは、なぜ藤原公任は白居易の詩をこのように多く選んだのか、また白居易の詩から政治詩や社会風刺詩を選ばなかったのはなぜか、について考察してみたい。

藤原公任は白居易の〈無常〉の詩を積極的に『和漢朗詠集』に選取りついている。その理由は、彼の人生観が白居易の無常を扱った詩に共鳴していたからであると言えよう。しかしながら、藤原公任が白居易の政治・社会風刺に関する詩作を『和漢朗詠集』の取捨の枠外にした理由もまた、彼の美意識の選択基準にあったと言えよう。当時の貴族たちは、「花鳥風月」という自然の風物を詠じることを和歌と詩歌の題材とし、それが平安時代の潮流となっていた。白居易の政治批判や社会風刺などは当時の和歌の題材となっていなかったのである。

また、藤原公任と白居易の人生を比較した場合、その相似点が多いことが指摘できる。まず、青年期から青雲の志を抱いた藤原公任は、才能と運に恵まれ、正二位権大納言まで昇任した。壮年期になってから、白居易と同じように、官途の頓挫を経験し、官職を辞める念が湧いてきた。結局、自分が志望した大納言の位

に及ばないまま、1024年に官職を辞めた。3年の後、出家した。一方、白居易は後年になると、仏教に惹かれ、洛陽に隠棲した。『和漢朗詠集』(1012年)はまさに藤原公任の不遇な時期に編集した詞華集である。

ここまでの検討の結果、『和漢朗詠集』は藤原公任の不遇な人生と無常観を反映した詞華集であることと、白居易の詩の選択は藤原公任の美意識を反映していることが明らかになった。

『和漢朗詠集』における詩歌の選択は、藤原公任自身の美意識を反映したのみならず、平安時代のいわゆる唐風文化と国風文化の融合体として現れ、当時の貴族たちの新しい「知」の享受の仕方を提供していたのではないだろうか。これに関しては、今後の課題として、『和漢朗詠集』に止まらず、藤原公任の他の著作と白居易の詩文・歴史文献などから出発し、その内容構成を複合的な視点で読み解き、後世への影響についても考察したい。

*引用した『和漢朗詠集』の詩歌は『和漢朗詠集』(小学館、菅野禮行校注 1999)に拠った。

【注】

- 1) 福田俊昭「和漢朗詠集に見える公任の潜在意識と学識」(『日本文学研究』第21号 大東文化大学日本文学会 1982) 2頁
- 2) 福田俊昭「和漢朗詠集所引の白氏文集」(『日本文学研』大東文化大学研究会 第26巻1987) 1, 13頁
- 3) 伊藤正義・黒田彰編『和漢朗詠集古注集成 第二巻上』(大学堂書店 1994年) 179頁
- 4) 星川清孝『楚辞』(明治書院新訳漢文大系第34巻 1970) 21頁
- 5) 同書, 257頁
- 6) 菅野禮行校注『和漢朗詠集』(小学館 新編日本古典文学全集91 1999) 402頁
- 7) 司馬遷撰 裴駰ら注『史記』(宏業書局 台北 1995) 407頁
- 8) 犬養廉・後藤祥子・平野由起子『平安私家集』(岩波書店 新日本古典文学大系82 1994) 327~329頁

(主任指導教官 水島裕雅)